

令和7年度学校評価表

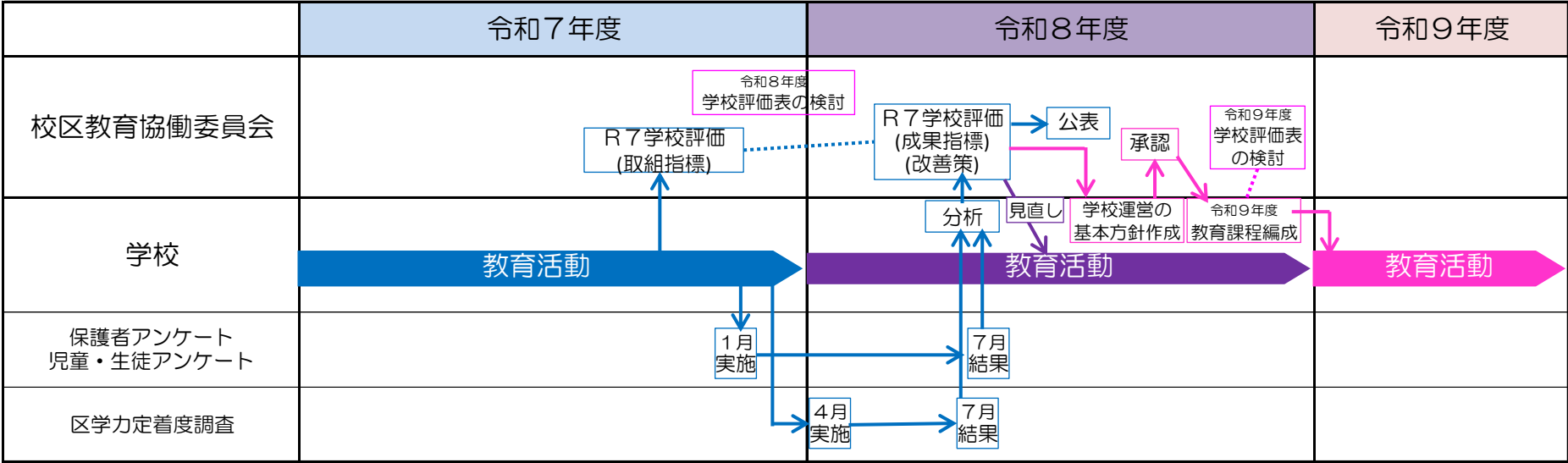
品川区立三木小学校	校長	高田 大
三木小学校校区教育協働委員会	委員長	庭野 正和

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和7年度の学校評価が令和8年度および令和9年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		○指導形態や指導方法の工夫を図り、確かな学力を身につけさせる ・習熟度別少人数指導 ・教科担任制 ・三木タイム ・古典の暗唱 ・学校図書館の活用 ・JETやALTとのTTによる英語指導 ・1人1台タブレット端末の活用		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	児童の学習意欲の高まりが見られる。ポートフォリオ「学習意欲」に関する設問(2問)で、児童の評価が85%以上。	「学習意欲」の肯定的評価は67.5%であった。設問別では「習ったことや教えてもらったことについて、もっと詳しく知りたいし、調べたい」59.6%、「新しいことをつぎつぎ学びたい」75.4%だった。	C	同ページ評価指標②から、児童は「授業」には好感触を持っていることが示唆されている。受け身の授業ではなく、自ら興味・関心を抱く「主体的な学び」に向かえるよう、児童への働きかけや場の設定を工夫していく必要がある。
	教員が日々の教材研究やOJTによる研鑽を通して、児童の興味関心を高める授業を工夫している。	教科交換を行うことで教材研究の深化を図ったり、教員同士のOJT研修を通して児童の興味関心を高める授業を工夫してきた。	B	
②	児童によく分かる授業が展開される。学校風土調査「授業」に関わる設問(3問)で、児童の評価が偏差値52.5以上。	設問別の偏差値は「授業中なにをすればいいか、はっきり教えてもらっている」53.0、「授業では、クラスの友達との間で話し合う活動をよく行っている」52.3、「学校の授業は楽しい」52.8であった。	A	学校の授業に対して児童からは肯定的に受け止められていることが読み取れる。引き続き校内研究を始めとした取組みを推進し授業の充実を図る。 また、児童同士の交流活動をさらに積極的に取り入れ、児童が主体的に学習を進める授業づくりを目指す。
	校内研究で国語の文学的文章の授業研究に取り組む。叙述をもとに想像力を働かせる児童の育成を図っている。	全学年が研究授業を行い、良く知られた教材文についても改めて研究の対象とすることで、叙述に即した読み取りを進める授業について研鑽を深めることができた。	B	
	ペア学習やグループ学習を各教科の授業で取り入れ、交流活動を通した児童同士の学び合いを活性化している。	校内研究でペア学習、グループ学習を取り上げたことをきっかけとして、どの学年、どの教科でも交流学習が充実してきている。	B	
③	児童の教科学習の力が向上し、品川区学力向上調査の結果において、各教科・各項目で設定された目標値に達する。	2,3,5,6年生は全教科で目標値を達成した。4年生は算数のみ達成した。項目では「知識・技能」「基礎」は概ね良好であったが「思考・判断・表現」「応用」では目標を下回る学年や教科があった。	B	国語の「基礎」「知識・技能」については2,3,5,6年で目標値を達成した。「ことのは」をはじめとした言語事項の学習内容が定着している。 算数の「基礎」「知識・技能」は全学年で目標値を達成しており、習熟度別指導や学習支援ボランティアの活用、未来塾による補充等の各取組の成果が見られる。 身に付いた基礎的な知識・技能を活用した学習が展開されるよう引き続き努めていく。
	毎朝15分の「三木タイム」において「ことのはノート」や「サントレ」を活用し、言葉の力の基礎・基本の育成を図っている。	「三木タイム」を1/3単位時間の学習として教育課程に位置付け、国語の言語事項の指導や、ワークテストを実施する時間、単元のオリエンテーションの時間等として活用した。	B	
	国語での並行読書、調べ学習でのレファレンス、図書ボランティアによる読み聞かせなど、学校図書館の活用がなされている。	図書ボランティアによる読み聞かせが盛んに行われ児童の興味を引き出している。国語の教材と関連して同作者・同ジャンルの並行読書を勧め、学校図書館の活用を促している。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○豊かな人間性・社会性を育てる ・キャリアパスポートを活用し、目標～実践～振り返りのサイクルを習慣化する。 ・市民科を通し、集団生活に必要な規範意識を醸成する。 ・「なかよし班」や「保育園児との交流」を通じて他者への思いやりの心を育む。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	児童の自己肯定感が育まれる。ポートフォリオ「自己肯定感」に関わる設問(3問)で児童の評価85%以上。	「自己肯定感」に関わる質問の肯定的評価は83.6%であった。設問別では「今の自分を気に入っている」80.7%、「自分はやればできる人間だと思う」85.1%等だった。	B	多くの児童が自己肯定感を得ることができている。これまでの取組を継続するとともに、自己肯定感が低い傾向にある児童の様子に配慮していく。
	全校昼会や「国語いろいろ」等で児童の頑張りを紹介・表彰する機会を頻繁に持ち、自他ともに認め合う風土を醸成している。	「国語いろいろ」のような校内の取組だけでなく、スポーツや文化芸術に関わる表彰も月1回程度紹介することができた。	B	
②	自ら立てた目標に向かって努力する態度を育む。ポートフォリオ「やり抜く力」に関わる設問(4問)で児童の評価85%以上。	「やり抜く力」に関わる質問の肯定的評価は77.4%であった。設問別では「困ったことがおきて、どうにかできると思う」80.7%、「学校や地域で触れ合う大人の姿を見て、自分も頑張ろうと思う」69.3%。	C	キャリアパスポートの取組にあたっては形骸化しないようにその意義について児童に良く働きかけること、振り返りをしっかり行うこと、また積み重ねによる継続性、累積性を意識させることを心がけていく。 主に高学年で職業についての調べ学習等を行い、自分と自分の将来、自分と社会に生きる人々が繋がっている自覚を持たせていく。
	キャリア・パスポートを活用し、学期ごとや行事ごとに目標設定と振り返りを行う習慣と態度を身につけさせている。	学期ごとや行事ごとに、キャリアパスポートを用いた目標設定と振り返りを行い、教室掲示として共有したり、ファイルに蓄積したりしてきた。	B	
	ゲストティーチャーや校外学習での現地講師の講話を傾聴することができ、憧れや尊敬に繋がる気持ちが育まれている。	ゲストティーチャーや現地講師の講話は興味深く聞いている。ただし自分の生活や将来と結びつけて受け止めている児童は少ないように思われる。	B	
③	児童に適切な人との関わり方が身につく。ポートフォリオ「ソーシャルスキル」に関わる設問(4問)で、児童の評価が85%以上。	「ソーシャルスキル」に関わる質問の肯定的評価は79.7%であった。高いものは「先生や友達が話しているときに最後まで聞くことができる」90.3%、低い項目は「他の人と異なる意見でも、自分の意見を言える」71.7%だった。	B	ポートフォリオの設問からは、自分から進んで関わることに課題があると捉えられる。あいさつ指導では「自分から進んで」がポイントの一つであるが、あいさつを始め様々な場で自ら関わりを持てるような働きかけをしていく。 異学年交流を通じた関係性の醸成は引き続き取り組んでいく。
	日常的なあいさつ指導や、代表委員主催の「あいさつ運動」の実施を通して、気持ちよいあいさつが交わされる環境を整えている。	6月の「あいさつ運動」では各学級1回ずつと代表委員、学級代表の「あいさつ名人」が朝のあいさつ当番を実施し、児童全体の意識の向上に繋がった。	B	
	「なかよし班」による遊びや清掃の活動、西品川保育園との連携を行い、異年齢の関わりを通して思いやりの心が育まれている。	異年齢が関わる活動を意図的に設けることができた。なかよし班に関しては教員数と班数・児童数の不均衡が校内体制の反省として挙げられ、令和8年度より改善する。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○健康な生活を送る態度を育む ・外遊び、体育の授業、体育集会、体力向上の各取組等を通して、進んで運動に親しむ児童を育てる。 ・学校生活全般にわたって姿勢指導を行う(ストレッチ、引き座)。 ・食に対する興味関心を高め、バランスのよい食事をし、残さず食べようとする態度を養う。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	自転車利用時のヘルメット着用率調査において、着用率が100%となる。	調査対象児童(267名)中、「常時着用している」児童が85%(227名)、「時々着用している」児童まで含めると96%(257名)であった。10名はヘルメット未所持であった。	B	ヘルメット所持率100%に向けた働きかけを続けるとともに、交通安全への意識を風化させないよう、長期休業前後など繰り返しタイミングを図って児童に伝えていく。
	毎月の交通安全指導、警察等を招いての自転車安全教室や歩行訓練を充実させ、児童の安全に対する意識を高めている。	3年生対象の自転車教室では多くの児童が自分のヘルメットを持参していた。毎月の安全指導については校内での指導日や内容を統一して計画的に実施している。	B	
②	スポーツテストにおいて、各学年において2種目以上、全国平均に達する種目がある。	各学年男女別の集計において、8種目中2～8種目が全国平均と同等ないし上回る結果であった。種目別では長座体前屈が、学年別では3年男子が全種目全国平均以上であった。	A	本校は休み時間において、3学年が校庭遊び、1学年が第2校庭遊び、1学年が体育館遊び、1学年が室内遊びとなるよう学年を割り振っており、運動する環境に十分恵まれているとは言い難い。しかし児童は限られた環境・限られた時間を積極的に活用し、体を動かすことに親しんでいる。教職員も機会を最大限活用できる手立てを工夫しており、これらの取組みを今後も継続していく。
	外遊びを奨励するとともに、「三木走」や「なわとび旬間」等の企画を充実させ、児童に日常的な運動習慣を育てている。	「三木走」「なわとび旬間」では達成度を記録するカードの内容や運用などを工夫し、児童が意欲的に取り組んでいた。	A	
	体育授業におけるテクニカルアドバイザー(TA)の活用を図り、個々の児童の技能の習熟や授業中の運動量の確保に努めている。	体育主任を中心にテクニカルアドバイザー(TA)の効果的な配置と運用を図り、体育の授業の充実を図ることができた。	A	
③	給食の残菜率において、副菜の残菜の年間平均が10%未満となる。	年間すべての副菜の残菜率の平均は8.4%であった。最も少ない日で0.4%から最も多い日で20.1%まで散らばりがある。	A	給食の残菜について、年間を通した平均としては標準的な値であったが、集計の過程において献立による残菜量のばらつきに懸念が残った。次年度は献立による残菜量の差異に注目しながら傾向を分析し、献立の改善や児童への食育指導に生かしていく。
	季節ごとの行事食の設定や、給食の材料となる食材に触れる活動等を行い、食への関心を高めて喫食の意欲を育てている。	季節行事にまつわる献立や、地方や外国の郷土料理を月1回以上取り入れた。低学年中心にさやむきや皮むきなどを行い、食材に触れる活動を通して親しみを持たせた。	A	
	児童による啓発活動を活性化し、ヘルスサポート(保健給食)委員会による献立放送やリクエスト給食などの取組を行っている。	毎日の昼の放送で児童による献立紹介を行った。栄養素と食材についても読み上げ、関心の喚起を図った。年度末には児童のリクエストを取り入れた献立による給食を実施した。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○「品川区いじめ防止対策推進基本方針」に則った取組を確実に実施する。 (「トリプルチェンジ」の授業、毎日のデイケン、いじめDアンケート、学校風土調査) ・「いじめをしない、させない、許さない」毅然とした指導を行う ・いじめの定義に基づいた聞き取り、指導を行い、指導した案件を確実に報告に上げる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	いじめを起こさない機運が育む指導がなされている。学校風土調査「いじめ」に関わる設問(2問)で、児童の評価が偏差値52.5以上。	「この学校では、けんかやいじめなどの問題を解決する方法を学んでいる」53.0、「この学校の先生は、いじめなどをしっかりと注意してくれる」53.3であった。	A	いじめの定義、構造、どのような時に起こりやすいか等は学べているが、実際の出来事に対して落とし込んで考えられているケースは少ない。実践力につなげることが今後の課題である。
	いじめ予防授業「トリプルチェンジ」を全学級で実施し、予防や対処のための考え方やキーワードが浸透している。	導入から2年間を経て、定期的に繰り返し取り上げることで、児童がいじめの構造を理解できるようになってきている。	B	
②	児童の規範意識が向上する。ポートフォリオ「規範意識・行動」に関わる設問(6問)で、児童の評価が85%以上。	「規範意識・行動」に関わる設問の肯定的評価は88.4%であった。設問別では85.1%～90.4%とすべての項目が85%以上だった。	A	規範意識、人権感覚、言葉遣いなど、児童は「どうあるべきか」は理解しているが、それが実際の言動に結びつくための指導は引き続き必要である。
	市民科授業や人権週間等の取組をはじめ、全教育活動を通して児童に人権感覚や道徳的实践力が身についている。	全校児童による人権標語作成と掲示の取組や、区の人権ポスター展覧会への出品など、児童に人権を意識づける活動を行っている。	B	
	教職員が児童のモデルとなる言葉遣いや態度・行動を示すことができている。	乱暴な言葉遣いや態度は見られないが、その反面、児童の不適切な言動に対して十分な指導がしきれない場面も見られる。	B	
③	児童が信頼して相談できる大人がいる。ポートフォリオ「学校・教職員・地域との関係性」(6問)において、児童の評価85%以上。	肯定的な回答について、「教職員への関心・信頼の向上」は69.5%、「地域の大人への関心・信頼の向上」は66.7%であった。「保護者との関わり」は72.0%であった。	C	肯定的な回答が低めの結果となった背景に、ポートフォリオの調査対象が高学年児童だったことも影響していると考えられる。次年度は対象を全学年に広げるとともに、高学年であっても信頼できる大人がいるとはっきり言える関係作りを目指す。
	学級担任以外の教員及び、教員以外のスタッフが児童と親和的に接し、心のよりどころとなっている。	専科教員や特別支援教室(風ルーム)教員、JTEや指導助手、栄養士、用務主事等多くの教職員が児童と関わり親しまれている。	B	
	スクールカウンセラー、各種支援員、別室指導や各種相談先が周知され、適切に活用されている。	スクールカウンセラーは継続利用者が多く、相談先として信頼されている。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		○品川コミュニティ・スクールの取り組みを推進し、家庭・地域等との連携を深める ○地域参加型行事の工夫や地域ボランティアの活用を推進し、保護者・地域との協力・連携を深める ・ホームページや学校便り、掲示板等で学校からの情報発信を工夫し、充実に努める。 ・地域の教育財産を生かした学習を開発し、教育課程に位置づける。 ・83運動、同窓会、登校見守りの方等、地域の方との関わりを意識させ、地域の一員としての自覚を育てる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	ポートフォリオ「学校への愛着」に関わる設問で、児童、教職員、保護者、地域それぞれの評価が85%以上。	「学校への愛着」に関わる設問の肯定的評価は、児童78.1%、教職員75.0%、保護者85.6%、地域100.0%であった。	B	児童、教職員の所属意識や愛着をさらに高めていきたい。定着している行事を無理なく継続できるよう洗練していくと同時に、それらの取り組みの起こりや経緯を振り返れるようにしていく。
	こいのぼり上げ等の伝統行事や、同窓会との関わりを通し、児童が学校や地域への愛着を持てる取り組みをしている。	こいのぼり上げや同窓生が講師となる授業、6年生対象の同窓会についての授業を通して、伝統の長さや大切さ、先輩や保護者の思いを体感的に味わわせることができた。	B	
②	ポートフォリオ「授業力の向上」「授業における地域住民・保護者との連携」に関わる設問(計9問)で、教職員の評価が85%以上。	肯定的評価の割合は「授業力の向上」78.2%、「授業における地域住民・保護者との連携」77.9%であった。	B	学校の教育課程として実施するものであるもので、学校が主体となって学校地域コーディネーターに相談・依頼し、必要な人材や場所をコーディネートしてもらうという流れを徹底していく。
	「まちの人々に学ぶ授業」や「学習支援ボランティア」事業を推進し、地域人材から学ぶ機会が児童の間に根付いている。	算数・英語の学習ボランティア、3・4年の理科のゲストティーチャー、2・3年の手話ワークショップなど、教育課程に位置付けそれぞれの学年の全児童に対して実施している。	B	
	教職員が地域にある学習材や地域人材を知ること努めており、学校地域コーディネーターを通して連携を図っている。	例年実施し継続している取組みに対して、教員が「元からある活動」という意識を持ってしまっている。学校の主体的な取組みとなるよう見直していく。	B	
③				

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成